

# ニンニクに発生する病害虫

病害虫研究担当 福勢かおる

## (1) はじめに

埼玉県では近年、加工用ニンニクの生産が始まり、栽培面積、地域ともに急速に拡大しています。その中で、複数の産地において様々な病害虫による被害が確認されています。生育期だけでなく、貯蔵中に症状が進行するものもあります。大きく減収する産地もありました(図1、2)。複数の病気や害虫が同時に発生することで、被害がより大きくなっていると考えられます。また、症状の似たものもあり、診断と対策が難しくなっています。そこで、今までに確認された各病害虫の特徴について紹介します。

## (2) 病害

- ア 細菌病・*Erwinia* 属、*Pseudomonas* 属など複数種の細菌が関わっている可能性があります。りん片が変色し、腐敗しますが腐敗臭はありません(図3)。収穫後の乾燥中に症状が進むことがありますので、注意が必要です。
- イ 乾腐病・本病は糸状菌(カビ)の一種である *Fusarium* 属菌による病害です。茎盤、根、りん片が腐敗します(図4)。土壌消毒により予防します。種球に感染している場合もあるため、健全な種球を植え付けることも重要です。
- ウ ウイルス病・5種類のウイルス感染が確認されました。症状は葉のモザイクと生育不良です。アブラムシやサビダニが媒介します。また、ニンニクは栄養繁殖作物であるため、種球を通じて次代で被害が生じます。ウイルスフリー株の利用とウイルス媒介虫の防除が有効です。

## (3) 虫害

- ア ネギアザミウマ・本種は微小な害虫で、様々な作物に寄生し、生育不良を引き起こします(図5)。生育期に使用できる薬剤がありますが、葉鞘内部に寄生していると薬剤が届きにくいいため、防除が困難です。
- イ ネダニ類・ネダニは土壌中に生息するダニで、様々な植物の地下部を加害して生育不良を引き起こします(図6)。生育期に使用できる薬剤がなく、土壌消毒で予防します。
- ウ イモグサレセンチュウ・本種は糸状の微小な生物で、肉眼で確認できません。多様な植物に寄生します。主に貯蔵中に症状が進み、りん片表面が変形し、内部が変質します(図7)。種子消毒と土壌消毒で予防します。
- エ チューリップサビダニ・本種は微小なダニで、肉眼で確認するのは困難です(図8)。葉のねじれや生育不良を引き起こすほか、ウイルス病を媒介します。種子消毒と生育期の薬剤散布により防除します。



図1 健全なニンニクほ場



図2 被害の深刻なニンニクほ場



図3 細菌病による症状



図4 乾腐病による症状

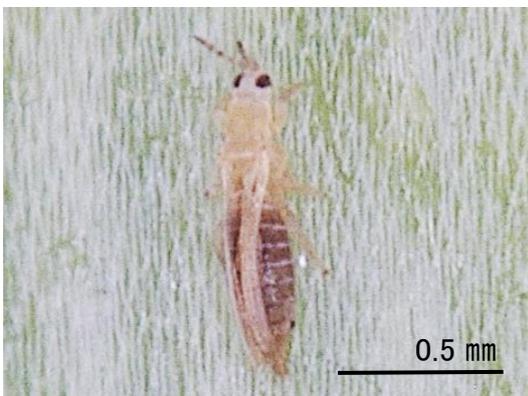


図5 ネギアザミウマ成虫



図6 ロビンネダニ



図7 センチュウによる症状



図8 サビダニによる症状